〈翻刻〉

上宮寺所蔵・清沢満之直筆「俗諦と道徳との交渉」の翻刻

川口　淳

凡例

○本翻刻は、清澤満之「俗諦と道徳との交渉」（自筆原稿、上宮寺蔵）の翻刻である。

○誤記と思われる箇所も基本的に原文に忠実に表記したが、旧字体は原則として新字に改めた。訂正や挿入された部分はできる限り底本と同じ箇所に翻刻した。訂正箇所について、現行の清沢研究の状況から、翻刻者は自身が判読できる限り積極的に翻刻した。

○原著者がカタカナ（〔例〕ドーカやザットなど）で記しているものはそのまま表記した。

○カタカナ表記の右隣などに、ひらがな表記や漢字表記に変更するような朱書きの指示が多数ある（〔例〕ドーカ（どうか））が、それについては脚注で指摘している。

○■は、原著者が塗りつぶしているため判読できない文字である。また、原著者が削除しているが判読可能な文字は打ち消し線を付加して翻刻した。

〔例〕前の時代に善と■■ゝ、様なこともあれば

○原稿で原著者が一本の線で訂正しているような見せ消ちと判断できるものは、一本の打ち消し線であらわした。

〔例〕此六かしさを実験したことのない人は

○原著者が文字を二本以上の線で削除していると判断できる箇所については「俗諦と道徳」とした。二本以上の線で削除されている場合は判読出来ない文字も存在するのでその場合は、「■」のように二重線と■を用いてあらわした。

○本原稿には、朱筆で圏点（文字のわきに、「◎◎◎」や「○○○」）と付されている箇所があるが、その点については、文字の上などに数多く朱書きされており、翻刻すると他の文字が見にくくなってしまうので、ここでは翻刻しなかった。圏点については、『精神界』第三巻第五号に収録された「宗教的道徳（俗諦）と普通道徳との交渉」の圏点箇所と一致している。ただし一箇所、二頁目の八～一〇行目の朱書きの圏点は、他の圏点と違う筆（違う色）で書かれており、それのみ『精神界』所載のものには反映されていない。この箇所だけは後の書き入れである可能性が高い。

○原稿用紙左右のページを一ページずつ示した。（原稿用紙一枚につき、二ページと考え、右側が奇数頁、左側が偶数頁とした。）

〔例〕→〔以上一頁〕

○朱書きで書かれた句読点指示については、赤字で記した。

○脚注において、便宜上、清沢満之直筆原稿「俗諦と道徳との交渉」について「【原】」と略記し、『精神界』所載の「宗教的道徳（俗諦）と普通道徳との交渉」について「【精】」と略記した。

俗諦と道徳との交渉[1]

清澤満之

道徳と云ふことは人世の最大事であると云はるゝのに精神界[2]紙上では之を尊重せざるのみならず、却て之を■■するが如き傾向あることは如何なる次第なるやと云ふ様な疑問を提出せら破壊せんとるゝ人が少くない。又或は又真宗には真俗二諦と云ふことがありて、其俗諦と云ふは、全く人倫道徳の教である、然るに精神界[3]の記者等は之を領せずして、徒らに真諦のみを唱導するは偏頗の失あるのみならず、大ひに真宗の体面を■国家社会に対する効益を■失はしむるものであると論難する人もある。以下少しく道徳と俗諦に就て自分の感し[4]居る所を陳へ[5]ませう。

全体真俗二諦と云ふ教は、深甚微妙の教でありて、而も亦頗る通俗の態度がある教である。故に動もすると其通俗の方面のみ■耳に入■ドーカれて其深妙なる方面を領解せざる人があることである。其詳細は一寸数言のみにては尽し難いがザット其概梗を一言すれば、仏法の大体は勿論人道より進み入り、小乗大乗顕教密教等ありとあらゆる教法を整へたる上に、尚其中に入る能はさる[6]者の為に最後の唯一法門

〔以上一頁〕

を以て一切衆生を一人(個)も漏さず救済せん(する)の道が即ち絶対他力無限大悲のあらん限りを尽したる教法が真俗二諦の教法であるのである。故に真仏陀俗二諦の教法が世の所謂倫理道徳を超絶したるものなることは無論であるが、其俗諦門と云ふものに■妙趣の存することは実に驚[7]くべき所である、。

倫理であれ、宗教であれ、凡そ世の中歎すに教と云はるゝものは■■■(皆)吾人の心に存する善悪の思念を基本とするものであ■(り)て、其善を進め、悪を制し、以て此心の安泰を得せしめんとする■■(を目)的とするものである。他の方面かゆ(より)云へば吾人は苦を離れて楽を得んとせる■(するもの)性であるが、其苦楽の中に於て此善悪の事に関する苦楽が最も優勢なものであるから、此苦楽に就て一定の安住所を得■■(させん)とするのが世の中の教と云ふものである、。

サテ[8]如何なることが善で如何なることが悪であるかと云ふことは、別に論のない様なことで、普通世ゆの人は■(皆)極りきつてある様に思ふて居れど、学者の研究により[9]て見ると中々ソー極りきつては居らぬ。甲の国で善とすることを乙の国で悪とし(す)(は之を)

〔以上二頁〕

前

前の時代に善と■れる様なこともあれば、（其反対のこともあり。）前の時代に善としたることを、後の時代には之を悪とすることもあれば、亦其反対のこともある。■■■云ふて見れば果して如何なることが真の善でありて、如何なることが実の悪であるかと云ふ様な疑問も起ることではあるが、今実地に倫理（の道徳）とか宗教とか云ふ教法を云ふ時にはソンナ議論や疑問はドーデモ構[11]はない。実地の倫理（道徳）や宗教を云ふときには今此国に■■（れない）前の時代や自分の住はない他国のことに用[12]はない。今目前にドー云ふ行[13]（ひ）を為すかと云ふ■（が）要点である。其時には外のことは構[14]ふて居れぬ。只自分の胸に於て此は善と思ふのが善で、此は悪と思ふのが悪である。其善と思ふことは之を行ひ悪と思ふことは之を行はぬことが常に出来れば、道徳も宗教も皆其処に含まれて居ることである、。

所が普通の人道徳や宗教の事が、世に六ヶ敷云はるゝは何故であるかと云ふに、人々が自分■自分に善悪のことを真面目（マジメ）に実行[15]せんとするときは、其が中々思ふ通り充分には出来ないと云ふことが知らるゝ様になる。■■（つと）むればつとむる程、い

〔以上三頁〕

よ〳〵実行の困難が明になる。而して其困難が進むと共に其に就ての思案を盛にする様になる。思案を盛にする様になれば、善悪のことに就ての論議が色々と生し来る様になる。現時日本の状態が丁度此処である。道徳の実行を進めんとする（希望）根拠よりして、今日は倫理の学説が盛に論究されつゝある。（動機）衍為が善なれば其結果の行為も従つて善であるとか、動機■（の）如何にかゝはらず行為■が悪なれば其は悪であるとか、議論としては面白い、研究の為には趣味が■■（深い。）ケレドモ[16]畢竟議論研究である。道徳の実行と云ふことになると議論や研究はドーデモよい[17]。人々各自に（と思ふこと）善を行ひ、（と思ふこと）悪を作さなければよい。其善（完全）に（と思ふこと）善を行ひ、（と思ふこと）悪を作さぬと云ふことが、六ツ完全にかしいのである。議論上や研究上の六かしいのとは丸で別の（こと）様である。此六かしさを実験したことのない人は若し六かしい議論や研究が終結せねば、実行には及べないと云ふ次第なれば、今日の如きはまだ中々実行にかゝれる時ではない。然るに道徳の実行はソー[18]云ふ次第のもの（こと）ではない。既に昔■より始められて居る。今之を始め■（ても）少しも差支はない。否今始めなければ何時始められるか（てよいか）あるか。恐くば其時はな（るべきで）

〔以上四頁〕

からう。デ[19]あるから道徳の実行は議論や研究にか、はりて居るべきことではない丸で別のことである。

実行の困難から一度議論や研究の途に入りたる所が、其処にも■常（色々の）困難があり（は）て容易に終結解決の出来ないことが明になる（と、）而して実行の方面に非常なる刺[20]戟（を感して、今度は一層盛なる熱心を以て実行専修の道に立還る■ことになる。）~~する様~~■~~かゝる~~此処には一つの（興）趣味のある所で、■（学問）■の素養や知識の欲望の盛なる人は、議論や研究に年月を費す間が長く、中には何十年と云ふ程此事■（に）かゝる人がある。然るに学問の素養も少く、知識の欲望も薄き者（に）は、容易に議論や研究の迷路を脱却する者が多い。頭から議論や研究を■（し）ない者も沢山ある。兎も角何れも終には実行の~~主張~~（ことのみ）に心掛る様になりて、其実行に就て困難を感する様になる。他力真宗の真俗二諦の教を聞きて其俗諦の教が容易く行ひ得らるものの様に思ふて居る人達は、マダ[21]此処迄来らずして、倫理や道徳の議論研究をして居る人達と同格の人達である。此は倫理学者道徳研究家の位地である[22]。現今の日本には此類の人が多い仏教者の中にも之にかぶれ居る人が少くない注意すべ（イキ）（イキ）

〔以上五頁〕

善を行ひ悪を作さぬことは困難な出来ることではないがしかし善を行ひ（容易には）

善を行ひ悪を作さぬことが容易に出来ることではないと云ふに就て、一言すれば（して）

よいことがある。其は[23]此ことは教とは（何れの教にもあら）ず■■普通はれてある、根本義とも云ふべきことであるが、更に一方より見れば、此ことは教と云ふよりも寧ろ天然自然の欲望であるとも云へる。我等は教を待たずとも善が行ひたひ、悪は作したくないと云ふ欲望が天然自然に具りてある。其であるから、若し此事が容易に出来ることなれば棄てゝ置いても我等は道徳を実行する筈である。然るに中々ソー[24]云ふ都合には往かずして、非常なる注意を以て教へても尚（充）実分に実行し得る者のなきは、外ではない。道徳の実行は所謂三歳の童子も之を言ひ得るも、八十の老翁■（も）之を行ふ能はざるもの（こと）であるからである。然るに真宗の俗諦の実行が容易に出来ることの様に思ふものあれば其は心得違ひと云はねばならぬ。

或は（人云ふ）真宗の俗諦は通常の（倫理）道徳とは其趣を異にするものである。通常の倫理道徳は宗教■（と）離れたる倫理道徳であるから実行が出来ないが、真宗の俗諦は真諦より

〔以上六頁〕

流れ出づる所の道徳であるから真諦の信心が確に決得せられてある上は自然必然に実行せらるゝ次第（こと）である■（と。此は）■一応（理）ある様（ことの）なれども、尚少しく注意を要する点がある。其は自然必然に行はるゝ事と、■■■（有）意■（作用に）■■■よりて行はるゝ事との区別である。自然必然に行はるゝことには、教の必要はない。教の必要のあるのは、其教によりて以て我等の有意作用を啓発せんが為である。故に真宗の俗諦の実行■（は）自然必然に出来ることであれば、[25] 別に俗諦の教は~~なくてよい~~（いらない筈）である。然るに殆んど真諦と肩を並べたるが如くに真俗の教さへあれば俗諦が教へらるゝ以上は、俗諦の実行は真諦の信心より自然必然に流（現）はれ来るものではないことは明白である。真諦の信心（に）より自然必然に得（獲）る所の（は）所謂現生十種の益がある（で）。■此は自然必然に獲らるゝものであるから、其に就てアーせよコーせよとか、アーせよ、[26] コーせよとか、アーせねばならぬ、[28] コーせねばならぬとか云ふ教はない。[29] 冥衆の護持を祈れ（願へ）とか、至徳の具足せんことを祈れとか云ふ様な教は一つもない。願はなくとも、祈らなくとも、自然必然に冥衆■護持（の）益も獲られ、至徳具足の益も得（獲）らるゝからである。十種の益の中には転悪成善の益

〔以上七頁〕

とか、知恩報徳の益とか云ふが如きは、善悪や恩徳に関したるものである。ケレドモ[30]

此は■■（冥衆）護持の益や至徳具足の益と同しく自然必然に獲らるゝ益でありて、此が為にアーせよ、コーせよと云ふ様な教はない。[31][32]

然るに（真諦の教と並んで厳然たる教として説かるゝものであるから、）

~~之れを要するに~~真宗俗諦の教は、決して信心より自然必然に現れ来る所のことを示したのではなくして、我等の有意作用を啓発せんが為に存する所[33]の（もの）教であることを知るべきである。ソーして見れば[34]真宗俗諦の教の実行の困難は、一般普通の実行の困難と別段変りはない~~ことは~~（と云ふて）差支はない。即ち換言すれは真宗の俗（倫理道徳の）諦の（完全なる）実行は容易に出来ることではないと落居すべきである。[35]

真宗の俗諦にしろ、一般普通の倫理道徳にしろ、（其）完全なる実行は六かしくとも、（其）幾分かは実行の出来ないものでは■■（ない。而して）修行すれは段々完全に近くことが出来る。[36]故にタトへ困難でも、其教は最も大（急要）切なるものである。亦其実行も最も~~大切~~であると■■（云ふ）が■■■■（屡々提出）せらるゝ議論である。此も一理ある~~申分~~（こと）ではあるが。精密に云ふ時には、此処で真宗の俗諦と一般の道徳との区別をせなければならぬ。一般の道[37]

〔以上八頁〕

徳では、他に我等が進歩すべき道はないので、何んでも角でも道徳的修行の一点張
であるからシテ若し此道を■にして最早前進の希望かゝはらず一歩づゝでも実
行せねばならぬと無理にでも決着する■■ことである。ソコデ[39]決着はよけれども実際
に至るときは■■に不安に陥りて、終には宗教に入るか、或は絶望してしまう様■■になる。然
あるに真宗の俗諦は、元来真諦と並び立て居るのであるから、前途の事は
皆悉く真諦の方で辨成してある。■■故に最早俗諦の方に於て自身の進歩を求めねば
ならぬと云ふ必要は少しもない。特に其実行に就ては前に述べたるが如[40]困難があ
りて、いくら勉めても決して立派なことが出来る訳もなく、且つ其実行の出来不出
来は人々の業報天賦によることでありて、業報或は天賦の劣等なるものは如何に
努力するも到底出来ない次第である。■■故に真宗の
俗諦は其実行の方面に於て■■■■■■成効を求むるにあらずして、其他■の点に於て効
の趣意力ある■のなることを知らざるべからず。真宗の俗諦は其実行が出来て我
等が立派な行ひをする様になるのを目的とするのでなくして其他の点に目的が

〔以上九頁〕

38 出来る出来ぬに進まなければならぬ。カラシテ

39 ソコデ決着はよけれども実際

40 困難があ

あるものであることを知らねばならぬ従て立派な行ひを目的とする一般普通の
道徳と、（真宗の俗諦と）は大に其趣を異にするものである。（言葉を換へて云）ことを知らねばならぬ然らば其目的は
へば立派な行ひをしようが劣悪なる行ひをしようが[41]其は■■■■■ドチラ[42]でも構[43]
何であるか　はない。（真宗の）俗諦の教はソンナ[44]所を目的とするものではない。■■■■■■■
　然らば真宗の俗諦の目的は如何なる点にあるか。其実行の出来難いことを感知
しむる■■（せのが目的■で）ある。此は　真諦の信心を得たる者に対すると、未だ信心を得さる者に
対するとの別はあれど　既に　も、何れの場合にても道徳的実行の出来難いことを感
知せしむる為と云ふ点に於ては同一である。其に如何なる妙趣があるかと云はゞ、
先づ未だ信心を得さるものは道徳的実行の出来難きことを感知するよりして宗
教に入り、信心を得る道に進む様になる。此は一寸見れは何でもないことの様なれ
ども、中々ソー[45]ではない。他力（の）信仰に入る根本的障礙[46]は、自力（の）修行■（が）出来得る（ことの）様に思
ふことである。其自力（の）修行■（と）云ふ事は色々あれとも、■（其）最普通の事は我等の道徳の
行為である。此道徳行為が立派に出来るものであると思ふて居る間は、到（倫理）底宗
教には入ることが出来ぬ。然るに　道徳術為に就て真面目に実行を求むると（倫理）他力の

〔以上一〇頁〕

きは、其結果は終に倫理道徳の思ふ通りに行ひ得らるゝものでないことを感知する[47]様になるのが、実に宗教に入る為の必須条件である。此場合には畢竟自力の懼心（迷）を降伏するが主眼であるから、真宗俗諦の教でも、世間普通の倫理道徳の教でも、或は又五戒十善でも、諸善万行でも、何でも差支はない。が真宗俗諦の教は直に真諦（門）を開示する組織になりてあるから、最も好都合のものである。次に信心獲得以後の者には如何なることになるかと云ふに、信心により、大安心を得たれども、尚習慣性となりて居る自力の懼（迷）心は断へず起我等は他力のり来りて止まない■■（こと）である。ソコデ[48]俗諦の教を聞かさるゝ時は、丁度其迷心に適当したる教であるから、直に之を実行せんとすることとなる。然るに段々（実行）に掛りて見ると、到底其出来難いことを感知して（するが為に、転して）即ち他力の信仰を喜び、所謂至心信楽己れを忘れて無行不成の願海に帰すと云ふ態度に立ち帰ることである。即ち此場合に於ては、俗諦の教は其実行の出来難きが為に愈他力無限の大悲を感謝するの念を深からしむるが目的である。然るに以上二つの場合の中、第一の に対する 場合は、寧ろ随宜転用と云ふ様な都合で、真

〔以上一一頁〕

宗には真俗二諦とか、二諦相依と云ふことがあると聞き、此は国家社会を忘れざる宗教であると云ふ様な点からして、未だ真諦の信心獲得は出来ずとも、兎も角倫理道徳として真宗の俗諦の実行を勉むる様な場合に、其が終に真諦の信心を獲得せしむる案内となるのである。シカシ[49]本統の二諦相依の真味は第二の場合にあるのである。真諦の信心あるが為に、俗諦の実行の出来ざるに驚かず、俗諦の実行の出来ざるが為に愈(弥)真諦の信心の有難味を感ずる所、実に相(依)資相資の妙趣があり〳〵と感知せらるゝことである。

俗諦の効用は前段■(に)述べたる第二の場合が本趣であるが、其趣味の進達に就き更に一言すべきことがある。其は此俗諦の効用が始めの間は実行の困難を感する[50]所に於て発現することであるが、其が段々進達する時は(は実)終には行難を感ずるに至るを待たずして(其が)発現する様になり、終には俗諦とか道徳とか云ふ[51]言葉を聞けは、直に二諦相依の真■(趣)を味ひ得る様になる。之を言ひ換へて見れば、俗諦とか道徳とか云ふこと(は)実行が出来ぬが、其出来(ぬ)のが当然である。其実行の出来ぬ様に我を無限の(は我には)

〔以上一二頁〕

大悲は摂取して捨てたまはぬ。ことである実に感謝の外はない有難いことであ
ると喜ぶことである。■■思念が俗諦とか道徳とか云ふ言葉を聞く時直に現起
する様になる。此思念の反初めは急に起らなかつたのが、終には証として他人が真
宗の俗諦の教に就て全く普通の道徳可能の者の如く、其実行が現はるゝことがある。其はコー[52]である。
出来ることと確執して、「守る」とか、「守らぬ」とか、「済む」とか、「済まぬ」とかことに煩悶する
者を見る時は、一方には其者の迷執を憐むと共に、又一方には自身の安住を喜ぶこ
と■である。此の「守る」、「守らぬ」、「済む」、「済まぬ」と云ふ、所謂義務責任と云はるゝことは実に
人生煩悶の大なる部分を占むることで、此道徳妄想の勢力は頗る雄大なるもので
ある。に於ける他力真宗の俗諦の教はヨシヤ[53]「斯くせよ」「斯くすな」と命令的態度に現
はさるゝことあるも、大体其根本に於て「斯くせねばならぬ」「斯くしてはならぬ」と顕
云ふ外圧■■力を認定せざるが故に、其煩悶タトへ[54]多少の煩悶がある場合にても、
普通の道徳妄想の煩悶の如きことはない。換言すれば普通の道徳妄想の場合にて
は「斯くせよ」「斯くすな」と命令せらるゝ時、之に「斯くせねばならぬ」「斯くしてはならぬ」

〔以上一三頁〕

と云ふ妄想が加はるが為に、神か仏が「是非此事をせよ」「決して此事はしてならぬ」と厳然たる命令を下さるゝが如く思ひ、従つて「此事をせねば助らぬ」「此事をしては助らぬ」と云ふ塩梅に、道徳行為の実行の出来不出来によりて救済の大事が成ると成ら[55]との別を生する様に思ふからして其出来不出来に関して非常なる煩悶がある

は当然の次第である。然るに他力真宗の俗諦の実行は、出来やうが出来まいが、救済の大事には毫も関係なきものであるから、ヨシヤ其[56]に関して多少の煩悶がありて[57]も、道徳妄想より起る煩悶に比す[redacted]べきものは[redacted]て少し実行の出来不出来もない。のみならず其煩悶の性質が丸で[redacted]異なりて居る。一方は鬼に責めらるゝ煩悶であるに対して、一方は仏の大悲に慚ぢ入るの煩悶である。一方は何処迄も容赦せぬと瞋怒云ふの烈しきに恐怖する煩悶の涙であるに対して、一方は何処迄も摂取すると云ふ慈愍の深きに感泣するの煩悶の涙である。

此の如き次第であるからして、真宗の俗諦の教は真諦の信心の外に、別に積極的に人道の規則定を与ふるものではない。若し積極的に人道の規定を与ふるものなれは、其綱領も確然一定し

〔以上一四頁〕

てある筈である。然るに或は単に掟と云ひ、或はザット[58]王法仁義と云ひ、或は又仁義礼智信の五常と為■(す)等、其事柄が頗る漫然と示してある。更に其根拠と云はるゝ五善五悪とか、唯除五逆誹謗正法とか云ふので見れば、亦少しく趣を異にする■(ことで)様に感せらるゝ(れ)。勿論強て此等を会通せんとすれば皆同一の事を云ふたものであるとせらぬ(をせない方がよい)。何ことも無いが、■■寧ろ牽強附会(ソンナ[59])と云ふ感を免れない故かなれば、前に云ひたるが如く、真宗俗諦の教は其実行が出来ると云ふ方が主眼ではなくして、其実行の出来ざる[60]ことを感知せしむるが主要であるから、其事柄は決して具に之を列挙する必要もなければ、亦事柄(其)を一定する必要もない。何でも構はぬ、善と云はるゝものを行はんとして見るがよい。悪(或)は悪と云はるゝものを作さぬ様(ざらん)にとして見るがよい。決して其充分なる実行が出来るものでないことを感知(開悟)するに至ることである。此開悟が即ち俗諦の教の要点であるのである。此要点が得られ(達せ)、此開悟が得らるゝのは是れやがて真諦の信心の喜ばるゝのである。故に俗諦の教はツマリ[61]真諦の信心を裏面より感知せしむるより外はないのである。■(即)ち真諦の積極的に対して俗諦は

〔以上一五頁〕

消極的に偏心を沙汰するものである趣味を有することである。故に此俗諦の教を以て積極的に人道を■守らしむるものであるとか、国家社会に忠を益するものであるとか云ふ様に思ふは大なる見当違ひである。勿論王法を本とし、仁義を先としと教[62]られは幾何か其実行を為すこともあれとも、其は寧ろ附けたりの事で、其よりは■其実行の出来なくなつた所が教の主要であるのである。然るに[63]からヨシヤ幾何かの効果あればとて其主要の所でな以上くして、其附けたりの所に就て尊重せらるゝのは一向目的にかなはない次第である。宗教的部分が本趣意であるのに其附属たる市廃棄さるべき道徳的部分が珍重せらるゝの■であるから変な訳合である。

大体俗諦部分が世の と道徳と■か、俗諦と国家とか云ふ様なことを、引き合はせて云ふ際には、■常■に其各の資格を明にして置かなければならぬ。先づ俗諦と道徳と就て云ふときは俗諦とは何事である と云ふことを明に知らねばならぬ。■世[64]云ふて見れは、直に気が附く■ことではあるが、俗諦は真諦と相並で他力真宗の教義である。即ち道徳の教ではなくして宗教の教である、人道の教ではなくして仏道の教である。

〔以上一六頁〕

して見れは俗諦は宗教家の説くべき所にして宗教的効果を目的とすべきは言ふ[ソー59]
迄もないことである。然るに道徳は道徳にして宗教ではない。人道の教にして仏道
■教ではな[い]。故に此は道徳家の説くべき所にして、道徳的効果を目的とすべきであ
る。政治家が商買[67]の事を云はぬこともない。ケレドモ[68]政治家は商人ではない。商人が
穀類の事を云はぬこともない。ケレドモ[69]商人は農夫ではない。宗教と道徳と■別■[を区]
して居る以上[は]其領分を乱す必要はない。若し宗教と道徳とを[の]区別を認めずして宗
教即道徳、道徳即宗教と云ふすはりを取るなれば初めより俗諦と道徳との関係
などと云ふ論は無用である。又其時は[真諦より]俗諦を離して道徳を云々すべきでない。真諦
俗諦共に道徳の教となることである。サテ[71]次に俗諦と国家[社会]との関係に就ても、大体
俗諦と云ふことは宗教の教である以上は、其国家社会に貢献する所も、亦宗教的功
績を貢献すべきことは言ふ迄もない筈である。然れは[72]既に真諦の教を提唱して宗
教的功績を貢献しつゝある以上は、其に俗諦を説かぬから国家社会に裨益がない
と責むる[は]異門の鑰である。若し真諦と俗諦とが別々のことを教ふるものなれば

〔以上一七頁〕

甲を説たがまだ乙が説かれぬから物足らぬと云ふてもよからうが、真諦と俗諦とは只表よりすると裏よりするとの違（ひ）のみにて、全く同一のことを教ふるのである

以上は、甲のみで物足らぬと云ふこともない筈である。其は兎も角ヨシヤ[73]俗諦を説きても其国家社会に貢献すべき所は其宗教的効果であるべきことは勿論であり

て、此は真諦の教をよりて既に為しつゝあることである。

宗教と道徳と（は）説く時は其に区別がありて、宗教者は宗教を説き、道徳家は道徳を説くはよいが、宗教を説くが為に道徳を破壊するは不都合であると云ふ議論がある。此は■一寸■困難な問題の様ではあるが。シカシ[74]何とも致し方はない。道徳と云ふものがサ程[75]脆きものなれば壊（こは）れるもよいかも知れぬ。サレド[76]宗教■者は矢張り宗教を説くのが本分である。本分を尽すとは道徳の第一義のは宗教的効果の為である。決して道徳を破壊しようとするのではない。其が為に道徳が破壊さるれば其は道徳が自ら壊れるのである。シカシナガラ[79]此の如き漫然たる議論は実際に適当するのであるかドーか[80]。宗教者は如何なることを説くか。■人を殺すと果して殺さぬも択

〔以上一八頁〕

む所はない、物を盗むとも盗まぬとも其は関する所でない、姦淫■したきものをして姦淫せし■よ等と云ふ。是れ宗教的見地よりして云ふ所。無限の大悲は殺盗姦淫等の有無によりて其救済を異にすることなき を説くに外ならぬことである。道徳家は之を如何に聞くか。[81] 是れ道徳を破壊するものなり、是れ人道を蠹毒するものなりとするか。若し此の如く直に断言するものあれば、是れ少しく大早計に陥りたる者である。若し宗教と道徳との区別を明知するものなれば、則ち云ふべきである人を殺し物を盗み姦淫妄語するものをも 而して 咎めず■■ 是れ寔に宗教の教として ソーなくてはならぬこと■■■然れとも[84]人道道徳上ずと云ふは、に於ては殺盗は罪悪なり姦淫妄語は許すならんべからざることである、之を犯すもの は皆是れ人道の罪人である。■■道徳の界の堕落漢であると。■■此の如くして宗教者は宗教的見地よりして 法を説き道徳家は道徳的見地よりして説を為す。二者別立して毫も牴触する所なきことである。唯其殺盗等の事に関する者其人を殺し物を盗み姦淫し妄語したる者■、道徳を先に宗教を後にするものなれば、其罪過を改悛して道徳の門に入るべく、宗教を先に

〔以上一九頁〕

して道徳を後にする者なれば、其儘に走りて宗教の（門に）入るべく、若し宗教と道徳とを并せて要とする者なれば、其罪過を改悛して同時に宗教と道徳との二門に入るへ[86]く、若し宗教をも道徳をも顧みさる[87]者なれば其儘にして悪術（罪悪の）を闇夜に彷徨す■（る）なら ん。■場合も之に準して知ることが出来る。ことである之を要するに宗教の説が（殺盗等の罪悪を犯さざる）道徳を害するとか、仏道を立つるが為に人道が破れるとか、只漫然たる議論のみでは■誤解を免かれ難い。事は須らく精密を要すべきである。宗教と道徳の区別が明かであ■■（りて）宗教者は宗教の分を守り、道徳家は道徳の分を守りて各其能を尽せば各其功績を国家社会に貢献することである。

以上他力真宗の俗諦と、世の所謂倫理道徳との交渉に就き自分の領解の儘を筆に任せて一点書きの積りで申述べたのである。病後の作粗漏を免れぬ■（段は■陳謝）■である 他に機を得ば■■■■を■■■■して置きます。

【以上二〇頁】

脚注

1 【原】俗諦と道徳との交渉（※朱筆で訂正されているがほぼみえない。精神界紙上のタイトルになるように朱筆がくわえられたと判断したい）――【精】宗教的道徳（俗諦）と普通道徳との交渉

2 【原】精神界――【精】『精神界』

3 【原】精神界――【精】『精神界』

4 【原】感し――【精】感じ

5 【原】陳へ――【精】陳べ

6 【原】能はさる――【精】能はざる

7 【原】存する――【精】存ずる

8 【原】サテ――【精】扨

9 【原】ソー（朱筆で「そう」カ？）――【精】そう

10 【原】ソー（朱筆で「そう」カ？）――【精】そう

11 【原】構――【精】搆

12 【原】ことに――【精】ことは

13 【原】ドー（朱筆で「どう」カ？）――【精】どう

14 【原】構――【精】搆

15 【原】真面目（ルビ　マジメ）――【精】真面目（ルビ　まじめ）

16 【原】けれども（朱筆で「けれとも」）――【精】けれとも

17 【原】ドーデモ（朱筆で「とうても」カ？）――【精】どうでも

18 【原】ソー（朱筆で「そう」カ？）――【精】そう

19 【原】デ（朱筆で「で」）――【精】で

20 【原】刺――【精】刺　※誤植カ？

21 【原】マダ（朱筆で「また」カ？）――【精】また

22 「此は倫理学者道徳研究家の位地である」という文章の左に「イキ」と二箇所記されているので、この文章を残す意図があった可

能性が高い。朱筆で句点が打たれている。精神界所載のものにはにこの文章がない。

23 【原】其は此のこと（朱筆で「其は」を抹消）――【精】此のこと
24 【原】ソー（朱筆で「そう」）――【精】そう
25 【原】あれば――【精】あれは
26 【原】アー（朱筆で「あ」）――【精】あー
27 【原】コー（朱筆で「こ」）――【精】こー
28 【原】アー（朱筆で「あー」）――【精】あー
29 【原】コー（朱筆で「こー」）――【精】こー
30 【原】ケレドモ（朱筆で「けれども」）――【精】なれども　※誤植カ？
31 【原】アー（朱筆で「あ」）――【精】あー
32 【原】コー（朱筆で「こ」）――【精】こー
33 【原】所もの――【精】所のもの　※原稿の脱字を補ったか？
34 【原】ソー（朱筆で「そ」）――【精】そう
35 【原】みれは――【精】みれば
36 【原】修行すれは――【精】修行すれば
37 【原】タトヘ――【精】たとへ
38 【原】カラシテ（朱筆で「からして」）――【精】からして
39 【原】ソコデ（朱筆で「そこで」）――【精】そこで
40 【原】たるが如（朱筆で「き」を補う）――【精】たるが如き
41 【原】しようが――【精】しようか　※誤植カ？
42 【原】ドチラ（朱筆で「どちら」）――【精】どちら
43 【原】構――【精】搆
44 【原】ソンナ（朱筆で「そんな」）――【精】そんな
45 【原】ソー（朱筆で「そ」）――【精】そー

46 【原】障礙――【精】障礙　※誤植カ？
47 【原】る様に――【精】に様に　※誤植カ？
48 【原】ソコデ（朱筆で「そこで」）――【精】そこで
49 【原】シカシ（朱筆で「しかし」）――【精】しかし
50 【原】感する――【精】感ずる
51 【原】とか云ふ言葉――【精】とか云言葉
52 【原】コー（朱筆で「こう」カ？）――【精】こう
53 【原】ヨシヤ（朱筆で「よしや」）――【精】よしや
54 【原】タトヘ（朱筆で「たとえ」）――【精】たとえ
55 【原】成らとの――【精】成らぬとの　※原稿の脱字を補ったか？
56 【原】ヨシヤ（朱筆で「よしや」カ？）――【精】よしや
57 【原】がありて――【精】があって
58 【原】ザツト（朱筆で「さつと」カ？）――【精】さつと
59 【原】ソンナ（朱筆で「そんな」カ？）――【精】そんな
60 【原】ざる――【精】さる
61 【原】ツマリ（朱筆で「つまり」カ？）――【精】つまり
62 【原】としと――【精】として
63 【原】が教の――【精】の教の　※誤植カ？
64 【原】ときは――【精】事は　※誤植カ？
65 【原】ソー（朱筆で「そう」カ？）――【精】そう
66 【原】ソー（朱筆で「そう」カ？）――【精】そう
67 【原】商買――【精】商売
68 【原】ケレドモ（朱筆で「けれども」）――【精】けれども
69 【原】云はぬ――【精】行はぬ　※誤植カ？

70 【原】ケレドモ（朱筆で「けれども」）――【精】けれども
71 【原】サテ（朱筆で「扨」）――【精】扨
72 【原】然れは――【精】然れば
73 【原】ヨシヤ（朱筆で「よしや」カ？）――【精】よしや
74 【原】シカシ（朱筆で「しかし」カ？）――【精】しかし
75 【原】サ程（朱筆で「さ」カ？）――【精】さ程
76 【原】なれは――【精】なれば
77 【原】サレド（朱筆で「されど」）――【精】されど
78 【原】ケレドモ（朱筆で「けれども」カ？）――【精】けれども
79 【原】シカシナガラ（朱筆で「しかしながら」カ？）――【精】しかしながら
80 【原】ドー（「ド」右に朱筆で「と」）――【精】どう
81 【原】聞くか――【精】聞くが
82 【原】是れ――【精】之れ
83 【原】ソー――【精】そう
84 【原】然れとも――【精】然れども
85 【原】是れ――【精】之れ
86 【原】入るへく――【精】入るべく
87 【原】顧みさる――【精】顧みざる